モリイク vol.21
MORI - IKU

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

コープ未来（あした）の森づくり基金レポート

モリイク

MORI - IKU

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.21
Apr. 2021

編集後記

コープ未来の森づくり基金の「森づくり」は、地球温暖化問題の解決のためにはじまったものです。ということは、木を植えてナンボという話もあったことでしょう。ところがおもしろいなあ、と思ったのは、森づくりについての最初の方針の時からすでに、植えるだけではなくて長く関わる森づくり、というコンセプトが練りこまれていたことです。具体的には、植えた木を育てるプロセスも大切にすること、木を生活の中に使うことで保たれる森、森と人のつながりと循環を大切にすること。

つまり、あすもりでは地球温暖化を含む環境問題の一番の問題点が、人と自然の距離が離れ、必要なつながりが失われてしまったことだと、当初から考えていたのです。自分ごとでない問題は解決に向けて本気で行動しません。だから、そのつながりを取り戻すことの大切さについて真剣に取り組んできたのでしょう。

この流れを受けて生まれたのが「Fの森」の森づくりの考え方ともいえます。森づくりをする市民自身が、木を植え、木を育て、じっくりと向き合う中で少しずつ取り戻すつながりが未来まで続くように、これからも大切に育てていかなければいけないと思いました。

https://www.facebook.com/coop.asumori

モリイク vol.21
2021年4月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金

ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C014687
VEGETABLE OIL INK
この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証林およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。

つなぐ COOP SAPPORO

北海道のあしたの森を育てる コープ未来の森づくり基金

コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

Fの森に行こう

モリ*イク

* contents *

*02 写真特集
Fの森に行こう

*06 みんなで歩こう
Fの森Map

*08 Fの森のひみつを探る
Fの森の解体新書

*14 親子で楽しむ森のページ
森のキモイ・キレイ

*16 木育エッセイ
森に聞く

*17 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語

*18 コープ未来の森づくり基金報告

Fの森に行こう

「Fの森」は市民がつくる市民のための森です。
地形の凹凸や水の一滴、
佇む木々、走るウサギ、
そして未来にこの森を歩く子どもたち。
全てを慈しみながらの「森づくり」の場を、
ぜひ見に来てください。

Photo: 小寺 卓矢(p02,03下、p05下)　檜山 知弘(p03上、p04)　宮本 尚(p05上)

Fの森に行こう

「Fの森」は、2012年に始まった市民による森づくりの場です。普通とはちょっと違う「Fの森」。何が特別なのか、ご案内します。

●みんなでつけた名前「Fの森」

「Fの森」の「F」は復活、ファミリー、フォレスト、ファン（楽しむ）、フレンドリー（親しみ）の「F」。
みんなで話し合ってつけた名称です。

●木々の成長を記録

ここでは1本ごとに番号札をつけ、育ち具合を記録しています。ウサギにかじられた木、雪で折れた木、途中で枯れた木。木が生きのびるのは大変だとよく分かります。

折れた幹の根元から何本も枝分かれするカツラ、枯れたと思ったら急成長したウダイカンバ、最初からぐいぐい伸びるケヤマハンノキ。となりの木々と競争しながら、個性豊かな育ちっぷりを見せてくれますよ。

●目印の木

あかえぞ口の交差点に数本立っているのはアカエゾマツ。「北海道の木」になっていて、寿命が長く、巨木になる針葉樹です。

この交差点はエリアを縦断、横断する道が交わります。遠くからでも目立つアカエゾマツは、交差点や自分の居場所がすぐ分かるよう、ランドマークの役目をしています。

●草花も大切に

カタクリは本来、広葉樹の森に生え、早春の樹木が葉を開く前に葉を広げ、花をつけます。木々の葉が茂って森が暗くなると、さっさとタネを飛ばし、葉を枯らして休眠してしまいます。ここでも、春先、牧草が育つ前に花を咲かせて、草刈りが行われる夏には休眠したのでしょう。か弱そうな姿ながら、自分の得意技をうまく使っているのですね。

●「ノラ」を活かす

「ノラ」とは、人が植えたのではなくて、タネが飛んできて生えた木々のことです。ノラネコのようにたくましい。無数のタネから芽が出て、木に育つなんてすごいこと。きっと強い生命力を持っています。だから、なるべく残しています。

クルミ平
自然に生えたクルミが群生している。こんな「ノラ」の木も大切なFの森の一部

●見つけた特徴が地名に

地名の大半は、最初の年、みんなで歩いてつけました。小川に土管の橋があったから「ドッカン橋」とか。沢や丘など、地形や土の湿り具合が分かってきます。

●木を伐るのも育樹

森づくりは、植えるだけでは終わりません。植えたあとの手入れが大切です。「Fの森」がある当別町は豪雪地帯なので、木が少し育つと枝が雪で折れる。木は何とか立て直そうと、すごいエネルギーを使います。折れ口から腐ったりもします。いっそ、スパッと折れ枝を切り落とした方が早く傷口がふさがり、木は上に育つ余力ができるのです。雪より上に枝が出れば、もう安心。

若木が育つと、今度は樹木同士の競争が始まります。光を求め、押しあいへしあい。放っとくと薄暗い、単調な森になってしまうので、将来を託す木を選び、密度を下げる「間伐」をすることになります。

Fの森では、こんな風に木の成長に長く人が関わる森づくりをしようと考えています。

まずはFの森がどんなところかご紹介

Fの森Map

Fの森は、以前は大きな牧場の一部でした。丘、沢、湿地…日当たりや水はけなど、いろんな環境があります。だからいろんな植物が好きなところを選んで生える。人間が勝手に決めたんじゃなくて、「育つ木が生える」のです。

最初のころ、みんなで歩いて地名をつけました。トンボ沢、カタクリの丘、ネコノメ湿地。ヒバリがいた斜面はヒバリーヒルズ。平らじゃないから土地に特徴があり、そこに生える木のイメージがわきます。あすもりテラスからは全体が見渡せるから、マップ片手に歩きだしてみましょう。

森づくりコーディネーター
山本 牧
NPO法人もりねっと北海道

●樹種は20種類以上で構成

植樹では、実際に歩いて、水はけや傾斜をみて、どんなタイプの木が育ちやすいか考えます。さらに実がなる木、背が高くなる木、秋に色づく木など、ゾーンの特徴を考えて、植える木の種類を選びます。

いろんなアイデアが出るので、なかなかまとまらない。最後は「育つ木が育つよね」と、自然に任せる感じになることも。

毎年の植樹では、20種くらいの樹木が植えられています。自然の森も、いろんな木が混じって生えていますね。同じ種類がきれいに並ぶなんてことはありません。植樹のルールは2つ。「北海道の木を選ぶ」「自然に逆らわない」。湿った土が好きな木、日当たりを好む木。個性はいろいろ。植えたあとに木々が競争し、自然の森のようになっていってほしいのです。

●どこでも行ける歩道

道があるって、当たり前ですね。でも、多くの植林地は道がないか、あっても端っこについています。でも、「Fの森」では歩道はエリアのまん中の見晴らしのいい場所を通り、どこへでも行けるようになっています。

ここは森をよみがえらせる場所ですが、人を拒む場所ではありません。木々の手入れをし、育ったら春の若葉や夏の木陰、秋の紅葉を楽しんでください。道は人が森に入り、森に親しむためのだいじな仕掛けなのです。

Fの森の解体新書

その① 市民がつくる森がすごい

当別町にある「道民の森 神居尻地区」。その牧草地跡の森林再生エリアに「Fの森」はあります。

コープさっぽろは地球温暖化を止めるために全道の自治体などと協定を結んで森づくりをしています。中でも新しい試みや考え方や技術を詰め込んだ森づくりが行われているのが「Fの森」なのです。今回は、他とはちょっと違う、あすもりが誇る「Fの森」のユニークなところをご紹介します。

森づくりはプロがやる？

森づくりといえば「植樹」。山の中にみんなで出かけて木の苗をたくさん植えて帰ってくる、というイメージの人が多いかもしれません。確かに森づくりの多くはそういった「イベント」のことが多いと思います。主催者は行政や企業だったりすることも多く、森づくりの知識や技術が少ないために関係する森林組合などの林業のプロフェッショナルに実務的な部分を委託することも少なくありません。すると、林業の植林のように、単一の樹種（多くは針葉樹）を大面積に画一的に植える「森づくり」になるのです。

普通じゃない？「Fの森」

「Fの森」はどう違うのでしょう。まず植樹には20種類以上の木の苗が準備され、植え方も画一的でなくランダムに近く、一見すると野放図で無計画にも見えます。だから一般的な森づくりとは見た目が大きく異なります。

でも実のところ、「Fの森」はその年ごとに植樹計画に力を入れた森づくりが進められているのです。その植樹計画を作っているのは、実は森づくりの参加者たち、つまり、林業についてはすっかり素人の一般市民のみなさんなのです。「Fの森」の最大の特徴ともいえる部分が、実はここにあります。

未来の森をデザインする参加者メンバー。はじめは森づくりの素人だった

素人市民、森のデザイン、はじめました

大抵の森づくりではイベントでやってきた参加者は指導者（プロの林業家）の計画と指導にしたがって決められた場所に木の苗を植えます。しかしその後に参加者自身が現場を訪れることは稀でしょう。多くの森づくりの参加者は受動的なのです。「Fの森」ではつくる森のデザインを参加者自身が考え、実行します。その意味で能動的な森づくりをしているといえるのです。

1年かけて森づくり計画

では、素人の参加者たちが森づくり計画なんてできるの？という話になります。自然には興味はあるけど林業なんてしたこともない、そんな人たちが突然森づくり計画をするのは、もちろん無理があります。ですから、一歩ずつ丁寧に森の知識や「Fの森」への考え方を深めていかなければなりません。そのために森づくりに興味のある人を集め、「Fの森」について学び、考える場をつくりました（Fの森ワークショップ）。このメンバーが現地を歩き、学んだことを生かして翌年の植樹の計画を練るのです。

早春のカタクリの丘。歩くことで知る「Fの森」の自然の営み

2012年、最初に「Fの森」にやってきたメンバーは森について本当に何も知らず、原野を歩くこともめったにない人もいました。だから、この年は木を植えない「歩いて見つけて考える」年でした。草原を歩きヤブをこぎ、イタドリの迷路に迷いながら手渡された地図に困惑していたメンバーですが、訪れる回数を追うごとに目指す方向に自由に歩くようになり、地形や植生、生き物たちとの出会いを頭に刻んで自然界の特徴を見つけていきます。そうして「どんな木が育ちやすいかな」「こんな森になってほしいな」などと考えを巡らせていくのです。

背丈を超えるオオイタドリの迷路を進む

こうして歩き回り、話し合う中で「ネコノメ湿地」や「トンボ沢」などの地名が地図に書き込まれていきました。

1シーズンをかけて、たっぷりと現場を歩き、学んだ後にいよいよ取り掛かる森づくり計画は、将来の子どもたちにどんなふうに森を楽しんで欲しいか、という願いを込めて、「紅葉がきれいな森」とか「おいしい実がなる森」などのテーマで考えます。ところが大抵は子孫よりも自分がどう楽しみたいか、で話し合いは盛り上がってしまいます。でも、そんなふうに楽しんでデザインした未来の森だからこそ、メンバーは何年も現場に通い、成長を助け、見守っているのでしょう。

先に植樹したAゾーンでは、大きく育ったミズナラやシラカンバの折れた枝を切り払い、まもなく間伐も始まります。こうして「歩く・計画・植樹・草取り・計測・枝払い・間伐…」と、一連の活動がサイクルになってつながっているのが「Fの森」の森づくりなのです。

ミズナラの枝を払う。植樹から育樹・育林の段階へ

森づくりは、人づくり

自然や森づくりにちょっと興味があっただけの参加者たち。「Fの森」を歩き、考え、たくさんの新しい学びに接したはずです。そう考えると、森づくりを通して未来を考える人づくりを、「Fの森」はしていると思うのです。森づくりは人づくり。もしかしたら100年先の人づくりも、「Fの森」では進んでいるのかもしれません。

Fの森を語ろう 「中の人」たちからのコメント

Fの森では、ワークショップ参加者の方々が、森のことを学び、これからの森の姿をイメージし、植樹のデザインをし、これをもとに植樹活動を行ってきました。それぞれの場所に適した樹種、将来その森でみんなが楽しめるような樹種をみんなで選定してきました。単に木を植えるというだけではなく、森のデザインまでみんなで考えるという点で、これまでの事業者のCSRによる森林づくりとして例のない先進的な活動だと思います。ワークショップ参加者の皆さんは、この活動を通して森に愛着を持ち、森林の手入れにも一生懸命に取り組んでおり、森との関わりを深めています。

Fの森ワークショップの取り組みは、あすもりの次のステップを指し示すお手本になるのではと思います。これまでのあすもりの活動は植樹の本数に目が行きがちでしたが、ワークショップでは、植樹活動から、森を知り、森との関わりを深める活動へと展開していきました。森づくりには森を知り、森に関わろうとする人々の存在が不可欠です。あすもりではこれまでも「森づくりは人づくり」を重視してきました。Fの森の取り組みをお手本にしながらあすもりの活動を発展させていければと思います。

柿澤 宏昭
北海道大学 森林政策学研究室 教授
コープ未来の森づくり基金 運営委員長

Fの森を語ろう 「中の人」たちからのコメント

ワークショップメンバーが講師の皆さんとFの森を観察して提案された森林再生プランは毎年マップに描き加えます。そのマップは積雪前に行う重機での地拵え作業やコープの森植樹祭でコープさっぽろの新入職員やNPO法人ezorockのメンバーとともに行う会場づくり、そして森づくりワークショップや育樹作業など森づくり全般に活用します。このマップづくりを含めて札幌地区のコープの森づくりをお手伝いするのが私の役割ですが、おかげでFの森の魅力を一番体感できる贅沢をさせてもらっています。

これまでの「森林再生プラン」で魅力がたっぷり詰まったFの森は、育樹体験や森づくりの参考にしていただく場所として整備し、今後も活用されるようになればと思っています。

植樹祭で苗木を植えたみなさんに「今日植えたこの場所を自分たちの森と思い、10年後、20年後と森になっていく様子を子どもたちやお孫さんと見に来てください」と話しかけます。みんなで考え想いを込めた森林再生を進めるコープの森づくり。みなさんがこんな森づくりに関わることができたら、北海道の大地と自然をもっともっと好きになれると思います。コープの森づくりはそんな活動だと思っています。

川口 弘高
NPO法人北海道市民環境ネットワーク（きたネット）
森づくり全般をサポート

Fゾーンの最初の姿（2011年）。何もない広大な牧草地（撮影：川口 弘高）

Fの森の解体新書

その② 多様な森づくりがすごい

広い広い牧草地、「Fの森」はそんな風景から始まりました。使われなくなったこの牧草地を森林に戻すために北海道との協定のもと、道民の森神居尻地区・Fゾーンで始まった「Fの森」の森づくり。その大きな到達点として目指すのは北海道の原生に近い森林です。一般的な植樹では、植樹作業をしやすい平らな土地で、表土を剥いだ（地拵えした）地面にトドマツなどの育てやすい樹種を一面に画一的に植えることで管理のしやすい植林地をつくります。しかし、「Fの森」では逆に原生の北海道の森を目指して、雑多な木が生える多様な森をつくろう、というのです。それは、もともとの北海道の森の姿をそのまま未来の子どもたちに手渡したいという思いがあるから。

では、どうやって「Fの森」をそんな森にしていったらよいでしょうか。

Fゾーンの魅力を探る

まず行ったのが地形の把握でした。尾根や斜面、沢や湿地など、地形によって水の分布が変わり、それに従って生える樹種も変わります。だから、まずは地形を確認することに。

次に、そこに生きる生き物たちを通して、Fゾーンがもともと持っている魅力を知ります。森づくりは表土に手を入れるので、もとの環境には大きな影響を与えます。その前にもともと持っている環境を最大限に生かそうと、じっくりと調査しました。すると牧草地では珍しいカタクリの群落が現れ、小さな沢ではイトトンボが飛びエゾサンショウウオが産卵し、丘の上ではヒバリが子育てするなど、たくさんの魅力を発見することができたのです。また、周囲の木々から飛んできた種が芽を出し、たくさんの木の子どもたちが自然に育ちつつあることも分かりました。

早春のスミレ。目をこらすとたくさんの魅力を発見できる

人が森に来るためには道が必要

こうして詳細に調べ上げたFゾーンに、そのまま残したい環境と植樹をすすめたい範囲を整理すると、この森に通す道の姿も見えてきます。多くの森づくりではあまり取り入れられていませんが、「Fの森」では森づくりをする人や森に興味を持つ人、イベントや教育活動などで森を訪れたい人などがいつでも歩けるように、森の道（トレイル）を通すことを大切なことだと認識しています。道があれば森に人が来る。それは、森と人とのつながりを保つ上で最初の一歩でもあるのです。

森づくりにテーマを

「Fの森」の森づくりの特徴のひとつは、細かく分けたエリアひとつひとつがテーマを持っているということ。たとえばカエデ類を多くした「紅葉がきれいな」エリア、ミズナラやハリギリなどの「家具の材料になる」木のエリア、ヤマグワやツノハシバミなど「おいしい木の実がなる」エリアなどなど。これは北海道の多様な樹種やFゾーンの地形をベースに原生に近い森を目指しながらも「人が訪れて楽しめること」を考えているから。100年後に森になったときにはみんなが楽しめる、来たくなる、そんな森づくりを目指しているのです。

「Fの森」は最初の植樹年（2013年）から8年が経過しました。この間で植えた木はずいぶん大きく育ちました。すでに人の背丈を大きく超えるものもたくさんあります。2013年に植えたエリアの木々は毎年成長を記録し、どのように育つのかを調べています。植えた木はまだ幼く、重い積雪に折れたりウサギに大切な枝をかじられたり、さまざまな困難にあいながら育ちますが、その記録をとることで、従来の植林ではない、多様な森づくりをするための未来への大切な資料を残せるものと考えています。

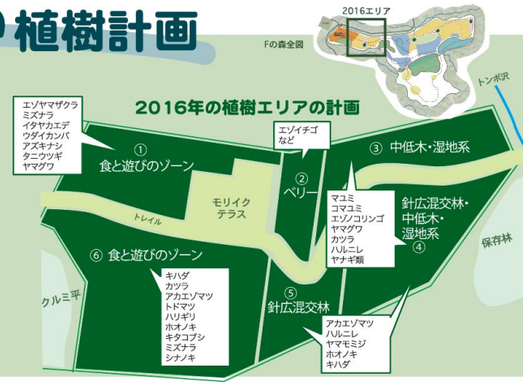
植える森から育てる森へ

森づくりというのは木を植えれば終わりというものではありません。草を刈って日当たりを確保したり、折れた枝を取り除いて木がまっすぐ伸びるように手助けしたり、これからはそうした「育林」の必要があるのです。人が植えた森は人が責任をもって育てなければなりません。「Fの森」でも育林の仕事が始まっています。

広い広い、使われなくなった牧草地、今では広範囲に木が植えられ、その姿はだいぶ変化しました。でも100年の仕事である森づくりは、まだ始まったばかり。これからも「Fの森」は、市民とともに少しずつ育ち、健やかな未来へとつながっていくことを願います。

Fの森の植樹計画

「Fの森」の森づくりでは毎年、参加者自身がどんな森にしようか話し合って計画を立てます。たとえば2016年は、小高い場所には「食と遊び」、斜面にはエゾイチゴなど、湿った場所は低木や湿地の木を中心にテーマをつくっています。現場を思い浮かべながら「こんな森にしたい！」とおしゃべりして立てる計画は、とても楽しいものです。



Fの森を語ろう 「中の人」たちからのコメント

鈴木 玲
手稲さと川探検隊・きたネット
Fの森ワークショップ講師

F森に入るとホームグラウンドに帰った気になります。雪解け後はカタクリが咲き、植えた木々は芽吹いたり雪折れしていたりウサギに食われていたり、夏には草に埋もれ元気だったり虫に食われていたり…。その日のワークショップに参加した方、来られなかった方々と、歩き回って考えて植え、年々育っている林は、なんとも愛おしい。

ここての森づくりの手法が最先端の取り組みであるばかりではなく、コロナ後の新たな時代に必要な営みだと思います。現地を歩き回って観察し、微地形ごとにどのような森になりたがっているのか想像し、こんな森があったらいいなとイメージして植樹計画を立て、植えた後も生育調査も継続して行っていて、研究者の解析・解説があって、理解を深めながら順応的に進めていく素晴らしさ。自然や生きものの時間の流れはゆっくりだし、私たちは思ったほど自然の仕組みを理解できていないし、謙虚に時間をかけて、考え直したりしながら自然と付き合っていくことの大切さを感じます。最初に計画ありき、決まったら猛スピードで計画通り完成させてお終いという、公共インフラ整備によく見られる違和感と正反対の進め方は、私たちの命のリズムとも合っていて心地よい。これからもずっと、この森を見守っていけること、素敵な宝物をいただきました。

Fの森を語ろう 「中の人」たちからのコメント

棚橋 生子
（地独）北海道立総合研究機構森林研究本部
苗木成長データを分析

Fの森はワークショップメンバーが考えて選んだ様々な樹種が植えられた森です。そんなFの森の最初（2013年）に植栽された樹木の成長を数年調べてみました。

現地は、土が硬く、どんな樹種でも植えてすぐに良好な成長が望める場所ではありません。加えて、雪が多く、植えた樹木の枝や幹には積雪による折損も発生し、動物（主にウサギ）に好まれる樹種では、食害も見られます。植栽後3年頃までは、森と呼べるまで成長するのだろうかと不安もありました。

ところが、数年経過すると樹木がしっかり見えるようになってきました。植栽した樹木の中では初期成長が早いケヤマハンノキや、栄養に乏しい土壌でも成長可能なイヌエンジュ、植栽地周辺から飛来した種子から成長したシラカンバです。これらの樹種は今後も良好な成長を続けると考えられます。特に種子から成長したシラカンバは、植栽地内に広く分布するので、シラカンバに覆われる場所では成長できない樹木も出てくることでしょう。

林業であれば目的以外の樹種は取り除くのが通例です。でもそこはFの森。これからこの場所をどうしていくのか、ワークショップメンバーと考えて、試していくのが楽しみです。

Fの森の解体新書

その③

森づくりメンバーの愛がすごい

みんなでつくる「Fの森」

「Fの森」にはさまざまな人たちが関わっています。森づくりを進めるメンバー（Fの森ワークショップ参加者）はもちろん、それをサポートする講師だったり、全体の運営をデザインする人だったり、植える苗を準備する企業だったり、それらみなさんによるコラボレーションなのです。そんな森づくりに関わるメンバーたちに話を聞いてみました。コロナの影響で「Fの森」に行けない日々が続いていますが、メンバーたちの森への思いとは？

Fの森の楽しかったこと

燕：燕といいます。開拓農家で自然の中で育ったから、植樹祭のチラシを見たらすぐに行きたいと思いました。

吉：吉川です。千葉に住んでいた時、コープの催しで竹林の整備に参加して、そっちでは仲間を作って竹炭を焼いたりしていたんですが事情があって恵庭に引っ越してから、炭を焼きたいなあ、と思って参加したのがきっかけです。

前：「Fの森」の森づくりに参加して楽しかったことはありますか？

燕：枝打ち！はまってはまって、楽しい！うちではとなりの家の枝も「習ったからやってあげる」と言って切ったりしてね、楽しいの。森では切った所がどうなってるかな、とか思ったり、それがまた楽しいの。

吉：いろいろ名前をつけましたよね。ヒバリーヒルズとか、歩き回った場所に。それが印象的で詩を作っちゃったりしました。

燕：最初に入った時はびっくりしたよね。オオイタドリが背より高くて、ヤブを漕いでずーっと行ったら開けた所があってヒバリが鳴いていて、そこがヒバリーヒルズだった。

宮：植樹のために地拵えしたら、こんなに広かったんだとか、ここは川が生まれる場所だったんだとか、いろいろ分かっておもしろかったよね。

燕：モザイクの植樹計画もみんなで考えるのがすごく楽しかったよ。木の成長を測りに行った時は、これでよかったのかな、もっと森らしく大雑把にすべきだったのかな、と思ったりしたけど。

前：どの木がどんなふうに育つか、テストエリアでもあったから、最初（2013年の植樹）だけモザイク状に植えたんだよね。そのあとはランダムに植えるようになった。

宮：植えたあとの草刈りを細かくやったりしたから大きくなってるよー。

吉：スタッフのおかげだな、見に行きたいな。

Fの森の学びについて

燕：枝打ちのやり方なんて全然知らなかったね。

吉：森づくり見学ツアーで下川町に行った時は木材以外の木の使い方とか、へー、おもしろいな、と思った。

燕：ちっちゃい苗の育て方とか勉強になったわ。そこらへんにあるタネを拾ってきたりしてね、楽しいんだわ。

宮：家で楽しんでもらえてよかった。それはひとつの目標だったよね。木を植えるだけで終わらないで、学んだことを家でもやってみるっていうの。

吉：木の名前も覚えたよ。公園なんかで木の名札があったらね、あ、植えた木だってわかるようになってね。千葉で竹のことはずいぶんやったけど、竹って植えられない。木を植えると、自分の心を託すというか。植えても面倒見ないと育たないしね。

Fの森、どんな森になる？

吉：人工林だから管理が必要なのはわかるけど、最終的には自然に返してやるのがいいのかな、って思うこともあるよ。いままでありがとう、あとはがんばれよってね。結論はわからないけどね。

前：いろんなエリアを考えましたよね。美味しい木のエリアとか紅葉がきれいなエリアとか。

燕：植樹の時はたくさん人が来たけどその中の少々の人はそんな森ができるのを楽しみにしてるんじゃないかと思うよ。世代が変わっちゃうと森に行くのが大変。行けば楽しいけど、なかなか行けない、というところが問題かな。植樹で来た子どもたちの何人かが続けてやってくれればいいなと思う。

吉：あと、あの川をなんとかしたいよね。子どもたちが喜ぶから、遊べるようにあの川を少し工夫したり。

前：40年もするといい森になってると思うから、紅葉を見たりクリスマスリースを作ったり山菜を楽しんだりしてくれればいいな、って思う。誰がこんなふうに植えたんだろうって話してくれたらうれしいな。

宮：いろいろ想像するけど今は「Fの森」には何もないんだよね。想像の森。それがおもしろい。何も知らない人にはこの絵は見えない。樹や森のことを学んで、次に来たら違う風景が見えてくる。成長した森の未来のイメージも見えてくる。そういう森になっていったらいいよね。

Fの森でやりたいことは？

吉：木材はまだ使えないからね。炭を焼きたくてペール缶を集めたんだけどまだ使えてない。イタドリを炭にしたりしたらどうかな、と思ってる。みんなが木を植えている間に焚き火して焼き芋を作ってればいいよ。きのこ汁も作って（笑）※。

宮：何十年後…私たちがいなくなった後に開けるタイムカプセルを埋めようか。この森づくりに関わった人たちは、どんなことを考えてこの森をつくったのか、分かるものが出てきたらおもしろいかな。こんな人が参加してこんな意見が出てこういう森をつくったのか、というのが、私たちがいない未来に、立派に育った森を見たときに分かる。その森、私たちは見れないけどね。未来の森のイメージを浮かべつつ、その時歩く人に向けて残すものがあってもいいのかもしれないね。

前：コロナがどうなるかわからないけど、森づくりにはまた行きたいですか？

燕：また行きたいよね。もう10年くらい経つもんね。どうなってるかなー、行ったらよかったー、って思うよ。

吉：同じ場所で続けていること自体が素敵ですよね。

宮：早くみんなで行けるようになるといいよね。

※道民の森は火気禁止です。焚き火等は原則できません。ご注意ください

話してくれたみなさん

前濱 喜代美 あすもり事務局
燕 育子さん Fの森に長年参加
吉川 和征さん Fの森に長年参加
宮本 尚さん（きたネット） Fの森の立ち上げに参加

Fの森を語ろう

「中の人」たちからのコメント

木村 浩二
雪印種苗（株）
苗木の提供や森づくり全般を担当

当初は現地調査・実施プランの作成・実施に向けた必要資材の調達・植樹・育樹技術指導などを担当するスタッフとして参加していましたが、途中からは雪印種苗という企業としての活動になり、あすもりとの共催という形で活動を実施しているところです。

参加メンバーそれぞれの想いを込めた森づくりをしているという点で、こんな贅沢な活動はないものと思っています。最初から植樹などは考えず、森を歩く・知るところから始め、四季を通じて同じ森を見る、という貴重な体験も魅力で、何度行っても新たな発見があります！ その中で、植えた樹の成長以上に元の植生に復元しようとする力も相当なもので、自然に飛んできた種や掘った土から樹や草花が生えてきたりと、変化に対する反発力（自然の回復力なのですが…）に圧倒されそうになります。ここはやはり手助けが必要で、どう楽しみながら、多くの人に知ってもらいながら進めていくかが課題と感じています。人の手で、自然の力を借りながら、時には森からの恵みもいただきながら、北海道のこの土地ならではの自然と身近に触れ合える森（場所）ができたらと思い、これからも活動していけたらと思います。

雪印種苗（株）自然復元事業　https://www.snowseed.co.jp/use/category/use_fukugen/

森づくりを支えるコラボレーション
～Fの森ワークショップ～

Fの森ワークショップ Since 2013
コラボレーションでサポート
× 雪印種苗株式会社

参加者が森づくりの主人公である「Fの森」は「Fの森ワークショップ」という仕組みで成り立っています。自然や森づくりに興味のあるコアな参加者を公募し、活動するのが「Fの森ワークショップ」。でも、集まった人たちは、いわば素人。森づくりを進めるために、専門家と協働して一歩一歩ともに進んで来ました。

植樹の苗木の準備や森づくり指導などで全面的に「Fの森」を支えてくれているのが、雪印種苗（株）です。「Fの森」の森づくりは緑化や自然再生について、専門技術を持つこの企業とのコラボレーションで進められています。ほかにも市民活動としての森づくりを支えてきたNPO法人北海道市民環境ネットワーク（きたネット）、NPO法人ezorockなど、こうした企業や団体とのコラボレーションで成り立っていることも、「Fの森」の大きな特徴といえるのです。

森のキモイキレイ

その17

のぞいてみたら何かがいるよ。
ちょっとキモチわるい？
よく見るとおもしろい！
さがしてみよう、森のいきもの。
ほら、いのちのふしぎにあふれてる。

わたしたちが暮らしているのは土の上。
でもね、ふだんは見えない土の中にも
たくさんのいきものたちが
すんでいるんだ！
ヘビ？ ネズミ？ ミミズ？
もっともっと小さい種まで、
それぞれの得意技を生かした
暮らし方をしているよ。

土の中の生きものたち

土壌（どじょう） 地球の表面にあるやわらかい層、土。

土壌はミクロサイズでにぎわっています。
目には見えない微生物や小さな土壌動物から見れば
アリやネズミは見上げるほどの怪獣のよう！
地上の動物と同じように食べたり食べられたりの食物連鎖や
お互いを利用し合う関係もあり、地上よりもっと多様な
世界が広がっています。

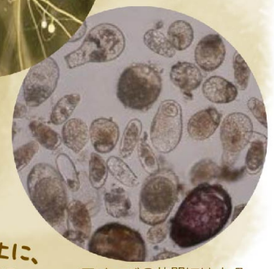
キミの一歩のその下に地中の世界が広がっている！

こんなにカラフルな土壌動物（どじょうどうぶつ）たちの世界が広がっていた！

拡大写真で見てみると

写真にはトビムシ、ササラダニ、トゲダニ、そしてカニムシも写っているよ。どれかわかる？

たくさん足があるのがムカデ、左の灰色に見えるのはワラジムシのこども、右のシルエットはコウチュウとハエ目の幼虫だよ



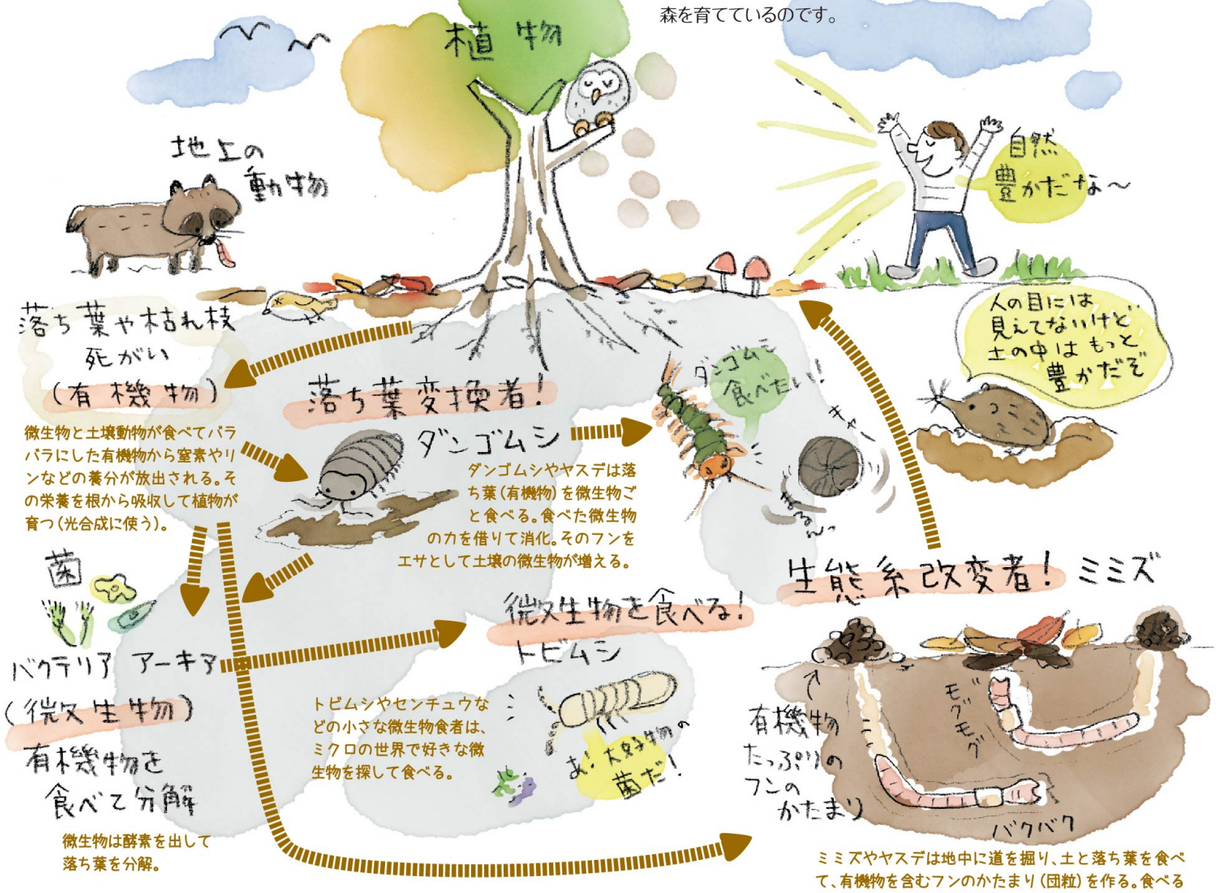
1グラムの土の中の菌糸をつなぐと、なんと200mに！

アメーバの仲間にはカタツムリのように殻（から）を背負って歩くものも

たった1グラムの土に、地球の人口を上回る100億以上の細菌がいるよ

地中の生きものはそれぞれ得意技を持っている！

森の落ち葉やフン、死がいがやがて土にかえり、
その土の栄養が植物を育てている。
それって実は、地中の生きものたちの技のおかげ。
私たちには見えない地面の下で、いろんな生き物たちが動き回って、
食べて食べられ、それぞれの得意技を生かすことで
森を育てているのです。



土は生きている

森では毎日、木が捨てる落ち葉のような廃棄物を土の生き物たちが食べて処理。森の成長に必要な窒素やリンを取り出して、根から再吸収できるようにします。土壌の生きものがいないと、木も地上の生きものも栄養を循環できなくなって暮らしていけません。

土が生きているから
森も生きている

お話を聞いた人

金子 信博 さん
福島大学食農学類教授

長崎県生まれ。京都大学大学院農学研究科中退、農学博士。
島根大学生物資源科学部助教授、横浜国立大学大学院環境情報研究院教授を経て、2019年から現職。
森林や農地における、土壌生物の多様性と生態系機能（土壌や植物との関係）の研究をしています。

落ち葉が色々なら土もにぎわう

人工林は木の種類が単調です。すると森の生きものも少なくなります。1種類の落ち葉しか落ちてこないと、土の生きものの種類も少なくなります。たくさんの樹木があり、地中の多様な生きものがいることで、栄養豊富な森になりますよ。

森では誰も耕さないし、肥料もあげませんが、樹木という巨大な植物が育ちます。植物は落ち葉から窒素やリンなどの栄養塩※を吸収できません。微生物や土壌動物が落ち葉をさまざまな方法で食べて、排泄物としてでてきたものの中に栄養塩が含まれ、それを植物が根から吸収します。
緑の葉のうち、動物に食べられるのは１割以下。残りは落ち葉として地面に落ちて分解されるので、土壌動物は地上動物の10倍くらい、そして微生物は100倍くらいいます。足下の生き物はみんな小さいので、森を歩いていても気がつきませんが、実は地球の生物多様性の４分の１は土壌生物だといわれるくらい賑やかな世界があります。

※栄養塩（えいようえん）：生き物が生活するために必要な窒素やリンなどの栄養分のこと

morinoko

新岡薫／エトブン社
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかける。クモはちょっとコワい。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。
http://etobunsha.com

宮本尚／きたネット
森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。最近はキノコのトリコ。しばらくやってなかったライブ活動を再開、シンガーソングライターです。
http://kitanet.org

森に聞く

森の開けた谷にその場所はある。向かって右が羊蹄山、左が尻別岳。林の向こうに見える雲一つない青空に稜線が霞むように続いている。その下は緑の海原だ。まろやかな広葉樹の谷と、それと対をなすように三角錐のディテールが整然と並ぶ針葉樹の斜面。それを遠景に私たちの若い森が広がる。むせるような緑の匂いと小鳥たちの鳴きかわす鋭い声、そして、スノーボールの中に降り落ちる無数の光の中に立つ時、世界は本当に円いと感じる。

この場所が無惨な剝き出しの土の斜面だった時を覚えている。もともと私たちがこの山林を取得した時すでに、1ヘクタール余りのカラマツ造林地の木々は売却済で伐採されることが決まっていた。

伐採跡は片付けられ、新しいカラマツの苗木を植えてもらった。長い時間はかかるが森は元の姿を取り戻すと信じ、私たちはカラマツの苗木の手入れを始めた、しかし…。

その後の数年間にネズミが樹皮をかじり、苗木をほぼ全滅させてしまったのだ。私は落胆し、苗木の植え直しとネズミの駆除を提案した。

しかし夫は首を横に振った。もう、植えないよ。

なぜ？　そう聞いた私に夫は森を指差した。

そこにはあった。植林されたカラマツが整然と並ぶ林ではなく、剝き出しの荒地でもない。パイオニア・ツリーのシラカバからはじまり、その後にマカバやハルニレ、カエデやミズナラなどが、鬱蒼（うっそう）としげる笹原の中に、育ちつつある新しい森が。

それは森が示した明確な意思に違いあるまい。人の手の及ばぬところで、森が森として再生していくための知恵と力の行使。

ならばと幼木の手入れを始めた。周囲の成長の早い雑草を注意深く刈り取っていく。数年を経て木々は、弱々しいながらも雑草から頭ひとつ抜けるほどに成長した。こうなれば下草刈りの必要はなくなる。

ところが草刈りは終わりにならなかった。変わらず木を避けて草を刈り、道をつけて林内を片付ける。なぜ、こんな事を続けるのか。

それはこの山を「うちの森」と呼び、精力的に森づくりに関わってくれている私たちの森の友、自称『森のじい』にとっても、少なからず疑問に思うところだったのかも知れない。

しかし、彼は秋も終わりの日にお気に入りの場所にマイ・チェアを広げて、シーズンいっぱいかけて自ら草刈りした場所を見下ろしたとき、その答えを見出した。

「やっと、自分がやっていることの訳がわかったよ」

彼の眼の前には空に向かって伸びる若い木々と、柔らかい木漏れ日が遊ぶ緑の地があった。みっしりと樹間を覆っていた下草を刈ることで、木々と空間は絡み合い、薄絹のスクリーンを重ねたような深い奥行きを生みだし、光は無数の粒となって森を満たしていく。

鬱蒼とした森でも木は生きられるだろう。しかし、森は誰のためにある？　もちろん森自身にちがいない。だが『森』と名付け、それを愛したのは人間ではなかったか。

美しく満ち足りた森と人との響きあいが、互いに幸福をもたらす。

私は夢見ている。私たちの森はこの先、長いながい時間を旅することになるだろう。いつか古森で出会った樹齢数百年のミズナラの木々が、私たちの森で育つことを、それを心から祈っている。

text / 齊藤 香里
介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『ようてい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

Column 植樹の図鑑　知っておこう。私たちが植える木にも物語がある。

大きな木の小さな物語

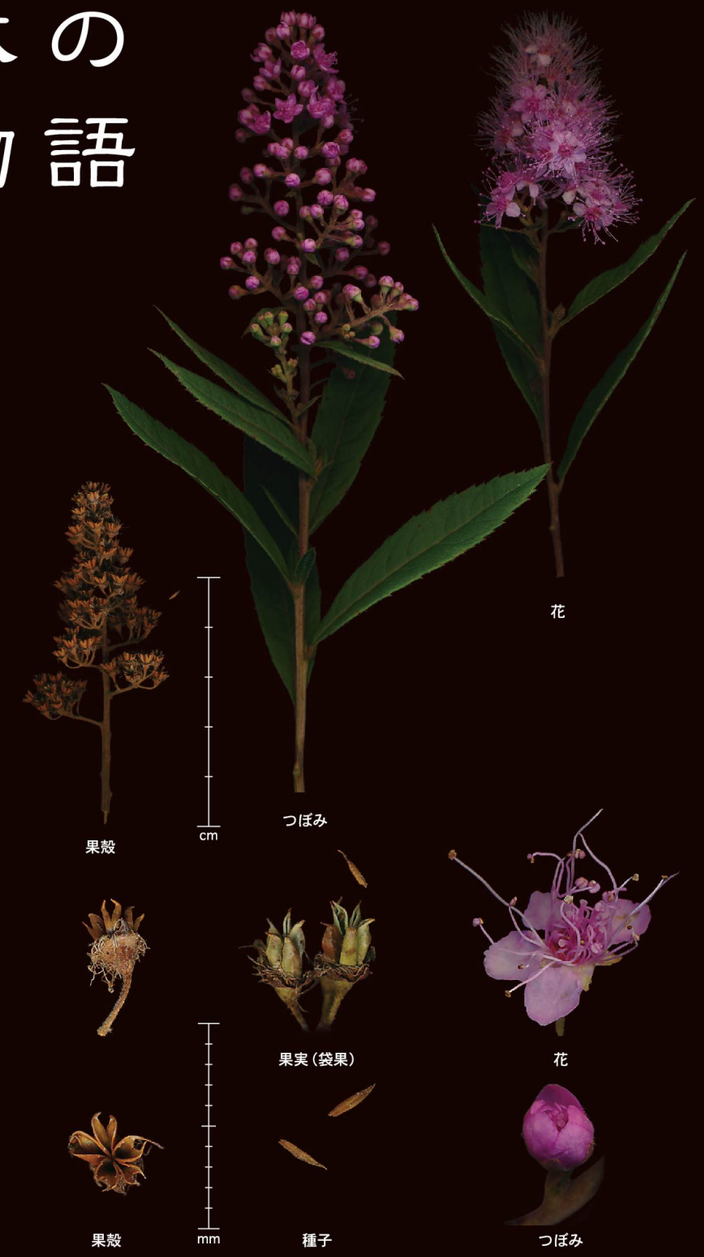
⑯ ホザキシモツケ

ホザキシモツケは高さが1〜2mほどの落葉広葉樹の低木です。

図鑑などによれば日本では北海道と本州中部の山地湿原に、ユーラシア大陸では温帯北部と亜寒帯に分布するとあります。ところが北海道では渡島・桧山・後志・留萌地方、つまり南部や日本海側には分布していません。さらに、育つ場所は湿原の縁などのかなり湿ったところで、身近な樹種ではないような気がします。また本州ではかなり分布域が限られていて、青森・岩手・栃木・長野の4県しか確認されていません。それぞれの県では、希少な野生生物をリストアップした「レッドリスト」にホザキシモツケを指定しています。

もう25年以上も前の話になりますが、釧路湿原の近くで道路の緑化計画を立てたことがあります。湿原の近くにはホザキシモツケの群落があり、その保全や増殖をどうするかが課題となっていました。その当時はホザキシモツケが全国版のレッドデータブックにリストアップされていて、かなり気を使わなければならない樹種の一つでした。はてさて種子を採取して種播きしないとダメかなぁ、と思って湿原研究者の辻井達一先生に相談したところ、「あっ、あれね。けっこう挿し木で増やせるよ。釧路博物館のＳ君が実験やっていたから聞いてごらん」というアドバイスをもらいました。さっそくＳさんのところにおじゃましてお話を伺い、論文もいただいて帰ってきました。結局、実際に挿し木まではしなかったのですが、その後苫小牧近辺で調査をしたときに工事で掘り返されたホザキシモツケからたくさんの根が出ているのを見て、なるほどと納得した覚えがあります。

アイヌ語ではシンケプとかニタツ・シンケプ（湿地の・止め串）と呼ばれます。筵などを止める串をシルニプといったそうで、それが訛ったのではと考えられています。少なくとも今の私たちよりは、ホザキシモツケが生活の近くにあったようです。



text/images 孫田 敏
‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士（建設部門：建設環境）。
著書：アトリウムと植生（積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計：絵内正道編著）、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方（水辺域管理―その理論・技術と実践―：砂防学会編）、森林管理と市民参加（北のランドスケープ　保全と創造：浅川昭一郎編著）
WEBサイト「Scan Botanica」http://scanbotanica00.sblo.jp

参考文献
佐藤孝夫,2011,増補新版 北海道 樹木図鑑,345pp,亜璃西社　伊藤浩司・日野間彰・中井秀樹編著,1994,環境調査・アセスメントのための北海道高等植物目録Ⅲ離弁花植物,480pp,たくぎん総合研究所
村田源,1995,ホザキシモツケ, 週刊 朝日百科植物の世界547,5-162〜5-163, 朝日新聞社　更科源蔵・更科光,1976,コタン生物記Ⅰ 樹木・雑草篇,265pp,法政大学出版会
北海道・青森県・岩手県・秋田県・宮城県・山形県・福島県・新潟県・栃木県・群馬県・長野県等のレッドリスト参照 2020年6月段階

asumori-report

Event Report

第11回

北海道の森づくり交流会

コロナの中でも続けよう。森づくりのつながりを育む交流を。

今年で11回目となる北海道の森づくり交流会が、2月20日に札幌市内のメイン会場と道内7箇所の会場をテレビ会議システムをつないで行われました。今回は新型コロナウイルスの感染防止対策のため、参加したのはあすもり助成を得た団体に絞られましたが、70人の方々にご参加いただきました。

記念講演では、あすもりの運営委員長を務める北海道大学の柿澤先生が今までのあすもりの活動を総まとめ。10年の活動を経てこれまでやってきたこと、その成果とこれからの活動について、2019年には10万本の植樹を達成しましたが、私たちの仕事は植樹の本数ではないこと、人と森をめぐる関係の作り直しや森づくりを通して自分たちの消費活動を考え直し、発信することなどについてお話いただきました。これからのあすもりの新しい局面では「つながりによる森づくり」をキーワードに改めて「森づくりは人づくり」に立ち返る必要性を考えさせられました。

そのほかにも参加した団体からは、特徴的で新しい試みがたくさん報告され、コロナ禍の中にも北海道の新しい森づくりのカタチが次々と生まれてきていると感じました。こうした森づくりの数々が北海道の未来につながっていくことを願います。

※この交流会は参加者に検温と手指消毒、マスクの着用をお願いし、会場も十分な換気に留意し、通常よりも時間を短縮して行いました。

2021年度高額助成団体と活動

NPO法人シマフクロウ・エイド（浜中町）
http://fishowlaid.jp

森が酪農地となったために環境が悪化、地域産業も影響を受けた。そこで持続可能な自然と産業のために森を再生させることに。森づくりや情報発信、知識の共有で生物多様性の高い森の再生を目指す。

子供と作ろう種から育てる未来の森（札幌市）
http://humu.jp/report/2150

札幌市の五天山公園、忠別川河畔林、コープのエコステーションなどで、生態的混播混植法を用いた森づくりで森林再生を行っている。現場の木から種を採り、育苗・植樹している。

森の輪プロジェクト（札幌市）
http://morinowakko.com

地域の木を使って、地域の職人が作った幼児のための玩具、「木の輪」を自治体を通じて新生児に贈るプロジェクト。地域の教育や産業、自然をつなげる木育的な取り組み。

Sponsors

2020年度 コープ未来の森づくり基金 ご協賛を頂いた企業・団体様

コープ未来の森づくり基金は、下記の企業・団体の皆様をはじめとする多くの方々に支えられて運営しています。

赤城乳業（株）
秋田いなふく米菓（株）
（株）あさの
アサヒ飲料（株）
アサヒグループ食品（株）
アサヒビール（株）
（株）浅利佐助商店
（株）アジア食品
味の素AGF（株）
（株）天塩
（株）イートアンドホールディングス
イチビキ（株）
一正蒲鉾（株）
五木食品（株）
伊藤食品（株）
イトウ製菓（株）
伊藤ハムデイリー（株）
井村屋（株）
岩下食品（株）
岩田醸造（株）
（株）宇治園
内堀醸造（株）
ＡＮＡフーズ（株）
エースコック（株）
江崎グリコ（株）
エスビー食品（株）
越後桜酒造（株）
（株）江戸屋
エバラ食品工業（株）
（株）えひめ飲料
江別製粉（株）
（株）大潟村あきたこまち生産者協会
大塚食品（株）
大塚製薬（株）
（株）大森屋
（株）岡畑農園
オタフクソース（株）
オハヨー乳業（株）
春日井製菓販売（株）
片岡物産（株）
かどや製油（株）
（株）金市商店
（株）カネカシーフーズ
カバヤ食品（株）
（株）かまだ商店
上北農産加工（株）
亀田製菓（株）
カルビー（株）
カンロ（株）
キーコーヒー（株）
（株）菊田食品
北日本食品販売（株）
北日本フード（株）
キッコーマン食品（株）
キユーピー（株）
共立食品（株）
キング醸造（株）
（株）銀座コージーコーナー
（株）ギンビス
久保田製菓有限会社
クラシエフーズ販売（株）
コアレックス道栄（株）
（株）湖池屋
有限会社幸伸食品
（株）幸田商店
合同酒精（株）
国分グループ本社（株）
国分北海道（株）
小西酒造（株）
（株）坂口製粉所
サッポロウエシマコーヒー（株）
札幌酒精工業（株）
（株）札幌バリ
サッポロビール（株）
沢の鶴（株）
三幸製菓（株）
（株）山樹氷
サントリーフーズ（株）
サンマルコ食品（株）
（株）ジーエムピー
シーズイシハラ（株）
（株）シーファーム
（株）J-オイルミルズ
ジャパンフリトレー（株）
（株）聖護院八ッ橋総本店
昭和産業（株）
（株）白子
（株）新進
（株）　真誠
新得物産（株）
（株）ソラチ
（株）ダイホク
（株）タカキベーカリー
タカノフーズ（株）
竹山食品工業（株）
田村製麺工業（株）
チョーヤ梅酒（株）
（株）土倉
テーブルマーク（株）
（株）テンヨ武田
（株）でん六
東海漬物（株）
東京サラヤ（株）
東洋水産（株）
東洋ナッツ食品（株）
（株）トキワ
中田食品（株）
（株）永谷園
（株）なとり
（株）七尾製菓
ニコニコのり（株）
日糧製パン（株）
（株）ニチレイフーズ
（株）ニッキーフーズ
日清オイリオグループ（株）
日清シスコ（株）
日清フーズ（株）
日本製粉（株）
日本ハムマーケティング（株）
日本ルナ（株）
日本食研（株）
ネスレ日本（株）
（株）ノースカラーズ
ハーゲンダッツジャパン（株）
ハインツ日本（株）
ハウス食品（株）
白鶴酒造（株）
（株）はくばく
はごろもフーズ（株）
ハナマルキ（株）
歯舞漁業協同組合
ハラダ製茶（株）
バリラジャパン（株）
東川町農業協同組合
ひかり味噌（株）
（株）ビックルスコーポレーション札幌
福山醸造（株）
フジフレッシュフーズ（株）
伏見蒲鉾（株）
（株）不二家
フルタ製菓（株）
ブルドックソース（株）
（株）ブルボン
ベストアメニティ（株）
ベル食品（株）
（株）宝幸
ホクト（株）
（株）ホクリヨウ
ホクレン農業協同組合連合会
北海道キリンビバレッジ（株）
北海道コカ・コーラボトリング（株）
（株）北海道日水
ポッカサッポロフード&ビバレッジ（株）
ポッカサッポロ北海道（株）
（株）ホッカン
（株）堀川　北海道事業部
マ・クルール（株）
マルコメ（株）
マルサンアイ（株）
（株）丸善
丸善製茶（株）
マルダイ　味噌販売（株）
マルトモ（株）
（株）マルナカ
マルハニチロ（株）
（株）マルハニチロ北日本
（株）丸三北栄商会
丸美屋食品工業（株）
丸永製菓（株）
三河屋製菓（株）
（株）みすずコーポレーション
三井農林（株）
（株）Mizkan
三菱食品（株）
三本珈琲（株）
（株）明治
森永乳業北海道（株）
（株）MON・CREVE
モンデリーズ・ジャパン（株）
（株）　ヤクルト本社
ヤマキ（株）
ヤマザキ製パン（株）
ヤマサ醤油（株）
山下食品（株）
ヤマナカフーズ（株）
ヤマサ醤油（株）
ユウキ食品（株）
ＵＣＣ上島珈琲（株）
UHA味覚糖（株）
雪印メグミルク（株）
横井チョコレート（株）
理研ビタミン（株）
（株）龍角散
（株）ロッテ
（株）ロバパン
（株）わかさいも本舗
（五十音順）

コープさっぽろ組合員の取り組み

つかおう　マイボトル！

マイボトルステッカー

プラごみの問題を解説

プラごみの削減を目指して小さなことから。

全道の組合員活動をしているエリア委員の交流会でSDGsを勉強する中、いつも準備していたペットボトル飲料をマイボトル持参にしてみようと提案したことがきっかけ。それから1年間、海岸の清掃やNPOとの活動など、勉強を重ねて気づいたことは、自然界で分解されにくいプラごみがこんなにも身近にたくさんあること、道路にあるそのゴミが川を伝って海に流れていくこと。それまでは、そのへんのゴミが海にたどりつくことなんて想像もできなかった。

そうしたたくさんの気づきから、ペットボトルを減らせたらいいね、と、このマイボトルステッカーを作ったのだそう。イベントや組合員活動などで手配りしながら説明していきたい、また、ステッカーがこの問題について家族や友人と語るきっかけになれば、とのこと。例えば、分別をしっかりしてリサイクルすればゴミは減る。自分たちが使ったものは責任を持って分別する、そんな小さなアクションを重ねていくことが大切なんだ、と話してくれました。

組合員活動委員会　坪江 利香さん　櫻木 真紀さん　吉田 千恵さん

Information

コロナでいろいろ大変だけど
みんなでがんばろう！

2021年度のイベント実施方針

事務局からのおしらせ

コープの森植樹祭	植樹協定継続地区では参加公募せず、関係者のみで実施
つながる森づくり企画	参加公募せず、関係者のみで実施
あすもり助成事業	従来通り高額助成・小額助成を実施
Fの森ワークショップ	例年のワークショップは中止。これまでの参加メンバーの同窓会を予定
円山動物園 どんぐりプロジェクト	中止。今後の予定・活動については動物園と協議

2021年度の森づくりなどの事業方針をお伝えします。

2020年は新型コロナウイルスの影響で大変な年になりましたね。あすもりでもほとんどのイベントが中止となり、参加者を公募してのいつもの植樹祭や森づくりプログラムを行うことはできませんでした。

2021年度もコロナの影響が続くことが見込まれますので、みなさんとお会いできる日がいつになるのかまだ見通しが利きません。早くコロナ禍がおさまって、みんなで森を歩ける日がくることを願います。

Present

アンケート&プレゼント

「モリイクvol.21」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか？右からそれぞれお選び下さい。

「Fの森」特集（P2～13）
森のキモイ！キレイ？（P14,15）
木育エッセイ（P16）
大きな木の小さな物語（P17）

Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか？（はい・いいえ）
Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

第2弾！ SPECIAL PRESENT!

アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、今人気リバイバル中のクマの木彫り（手のひらサイズ）をプレゼントします。作者の野村一夫さんは奈井江町の80代。引退を考えているらしいので貴重な一品になるかも？

応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。
プレゼントの当選は発送をもって替えさせて頂きます。

応募締切　5/31(月) 当日消印有効

コープさっぽろ基金事務局
〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号
FAX：011-671-5743
メール：csapmori@sapporo.coop

こちらからもメールできます